いきいきとした国語学習指導の試み

―― 出会いを大切にした俳句指導の工夫 ――

寺　本　　学

Ⅰ　は　じ　め　に

学習者にとって興味・関心のわかない学習は、ただ教師から生徒への知識の伝達に過ぎないのかもしれない。特に俳句という定型に根ざした日本独特の文学の学習においては、指導者は、結局は生徒に自分が鑑賞した内容を理解させようとしていることが多く、従って、俳句作品の理解や分析の指導にのみ気をうばわれてしまうことが多いのではないだろうか。だから、教えよう教えようとすればするほど、生徒から離れて行くのが俳句学習であった。それは、学習者のいない学習指導であり、俳句学習の意味をなさないのではないか。いっそ、俳句に出会う機会の少ない学習者を、たくさんの俳句作品と出会わせる。その“出会いのさせ方”を工夫することで、学習者自身の心の中に揺り動かされてくるもの（共感・反発・驚き・悲しみ・寂しさ・あかるさなど）を大切にして、身近にある古典である俳句の持つリズムやことばの持つ力を感じさせることができないかと考えるようになった。

「子供たちが詩と出会い詩の言葉を味わう経験は、日本語特有の音韻の響きやリズムに触れ、言葉のイメージの豊かな広がりに目覚めるための格好の経験である。しかし、これまでの詩の授業は、一般に、作者の心情の「理解」と「解釈」に傾斜しており、言葉の豊かさの自覚的な追求は必ずしも十分であったとは言えない。(注1)」ここに、詩（短詩型文学の中の俳句も勿論含めて）の問題が示されているように、学習者たちと俳句を出会わせるということは、指導者のレールに生徒を乗せ、解釈を教示することが大切なのではなく、将来にわたって日本語のリズムを楽しみ、五七五の17文字の中に秘められた豊かな世界に想像を広げ、楽しみ、親しんでいく態度や心を養うことが、まず、第一ではないだろうか。

「・・・いろいろな文芸様式の中で、俳句がいちばん親しみやすい日常の文芸だと思うからです。私たちがふつうに暮らしていながら、つい見のがしがちなものごとの輝きをすっと見せてくれるのが俳句なのだと思います。身のまわりのものごとは、本当はそれ相当に輝いていて面白いものだということを、私たちはつい忘れがちだと思うのです。俳句はそのへんをきちんとつかみ出してくれる文芸様式です。(注2)」と足立悦男氏が俳句学習の意義を述べている。筆者も、今日の中学生たちにとって、文語・定型という二つの拒否要素をもつ俳句であるが、生活の中のきらめきを心で感じ、言葉の中に潜んでいる、言葉によって表現されている自然や人生、生活や作者と自己を関わらせながら多くの作品に触れていくことによって、自分自身の言語生活を広げていくことができるのではないかと考える。

Ⅱ　研究のねらい

この研究は、国語科の学習で行われる詩（特に短詩型文学の中の俳句）の扱いが、従来、作者の心情の理解と解釈に偏りがちであり、それが俳句の学習を知識伝達の新鮮味のない授業に偏らせていたという課題について、“出会い”を大切にした学習を組むことが、生徒の短詩型文学への抵抗を和らげ、俳句に親しみ、作者にせまり、イメージを広げ、想像力を豊かにする、つまり、一人ひとりの受け取り方・感じ方・考え方がいかされるような、いきいきと学ぶ力につながっていくものかどうかを考察してみようとしたものである。

Ⅲ　研究の基盤

1. 俳句との出会いと親しむことの重要性

まず、中学生が実際にどれだけの俳句と親しんできているのだろうか。小学校で学習した俳句は、ほんのわずかであり、例えば、光村図書では「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」「春の海終日のたりのたりかな」「痩せがへるまけるな一茶これにあり」「外にも出よ触るるばかりに春の月」「夕風や白ばらの花皆動く」「犬の子のどこもやはらか野分中」「スケートの紐結ぶ間も逸りつつ」などである。この扱い方いかんでは、生徒が叙景的な世界を持つ俳句に対してどういう印象を持っているかは不安なところである。事実、中学生の俳句についての印象は、古臭い、年よりくさい、堅い、わけのわからないもの、自分とかけ離れたものという印象が強いのである。

野地潤家氏は俳句教材を取り上げて指導する際の基本をこう述べている。「詩・短歌・俳句教材を取り上げて指導（鑑賞・実作いずれの場合も）を進めていくのに基本となるのは、まず、学習者（児童・生徒）に詩・短歌・俳句への親近感を抱かせるように努めることである。指導上、手ちがいがあって、学習者（児童・生徒）に詩・短歌・俳句教材に疎外感を持たせてしまうと、学習意欲を盛り上げていくことは難しく、詩・短歌・俳句に出会って、味わっていく喜びを得させることが望めなくなってしまう。」(注3)と。

日常生活の中でも標語やコマーシャル、新聞などで、五・七のリズムはあふれている。けれども、それが俳句の世界とは結び付いていないのが生徒の実際ではないだろうか。であるからこそ、生徒は俳句は自分には遠い世界であるかのように思い込み、自己との関わりをなにも見出だせないまま来ているのである。その上、教師側から、俳句の学習で解釈と分析を押し付けられたのではますますこの俳句という世界から遠ざかっていくのも当然である。

私たち教師がすべきことの一つは、子供の頭の中を作品の分析や解釈でいっぱいにすることではなく、今後続いていく言語生活を豊かにしていくことであろう。俳句というものを生徒に抵抗なく出会わせ、親しませることによって、一人の人間としての言語生活の中に俳句を近づけていくことが重要だと考えるのである。

今まで自分がどうしてもできなかった、解釈や分析から逃れた俳句指導の一つの試みを図書館にある50冊の歳時記を利用して、ここで示してみることにする。学習を離れても、日常生活の中で俳句に楽しく触れあっていくような気持ちを起こさせることができれば、この実践の価値はあ

ったといえるのではないだろうか。

2. 指導のポイント

筆者がこの実践で押さえるべきポイントだと考えたのは、下記に示すような“出会い”である。

1) 歳時記との出会い……自然（季節）や人生をことばから感ずる心を大切にする。

2) たくさんの俳句との出会い……教科書・便覧・歳時記により出会いの絶対量を増やす。
（教科書のみでない教材を開発する必要がある。）

3) 自己との出会い……新たな（認識を新たにさせられるような）自分の発見、作品と自分との関わりを見つける。

4) 実作からの発見と出会い……下手でもリズムや季語に慣れ、親しむ。

5) 違う鑑賞との出会い……解説、他の生徒が選んだ俳句、視点との出会いによって自己をふくらませる。

これらの出会いをどうやって作っていくか、より自然な状態で日本文学の伝統に目を向けさせ、抵抗なく出会いを作っていくかがこの単元のポイントといえる。そのためには、個々に人と違う自分なりの個性あふれた自信のもてるものを持たせてやらなければならない。そして、出会いを作ると共に、自己を切り開くような、認識を揺さぶるような学習にしていきたい。

Ⅳ 実際の授業

1. 実 践 ①

1) 単元名「私の四季を作る」～俳句で創る一年～
（3年生　昭和63年12月実施）

2) 教材「俳句―世界で最も短い詩」（鷹羽狩行）・現代俳句歳時記（編者・水原秋桜子）

3) 単元設定の理由と学習の基盤

長い伝統を持つ俳句は、特有の形式やリズムや言葉が使われているためにどうしても鑑賞が難しくなってくる。また、俳句は中学校に入ってから初めて三年生で扱うことが、よけいに俳句と生徒との距離を持たせているように感ずる。

これまでは俳句の指導といえば教科書に載っている俳句を生徒に割り当てて調べさせ発表させたり、一句ごとにたくさんの言葉や場面・人物・音・色などを言わせてそれをまとめたりということが多かった。しかし、本当にそれで俳句を指導したことになるのか、という疑問がいつも頭に残っていた。

そこで、今回は、学習者に自ら俳句の中に飛び込ませ、一つでも二つでも心に残る俳句を見つけさせるために、この教科書に載っている俳句を中心にして俳句への第一歩を踏み出し、その後、歳時記を使った学習展開を考えてみた。

俳句を指導していこうと思うとき、解釈の方に重きをおくのか、俳句に親しませる方に重きをおくのかによって指導の方法も変わってくる。今回は、この歳時記を使って自分の感じる一年を俳句を入れながら創作させることにした。ただし、その俳句の解釈を細かく問うのではなく、あるテーマにそって歳時記を見つめることによって少しでも俳句への抵抗をなくし、俳句に親しま

せたいというねらいである。

なお、学校に備えてあるのは「現代俳句歳時記」（S、55 ― 編者・水原秋桜子 ―）であり、季節を各三節に分かち、すべて太陽暦にしたがって編集してある。また、季題は自然・生活・風習・動物・植物という分類である。

4）目　　標

① 俳句についてのテープや発言を聞く中で、聞き取る力をつける。

② 俳句についてのお互いの想像を聞き合う中で、自分の世界を広げる。

③ たくさんの俳句に触れ、好きな俳句をつくる。

5）指導計画

- 第一次……教科書用のテープを聞き取り、俳句の約束について理解する。（1時間）
- 第二次……教科書に解釈のほどこしてある二句をとりあげ、みんなで俳句の世界を想像してみる。（2時間）……実践②の第三次の活動を参照のこと
- 第三次……教料書の参考俳句について考える。（1時間）
- 第四次……歳時記をつかって大きなテーマの中から俳句をさがす。（4時間）……資料A
- 第五次……四季の俳句を入れた手作りはがきを作る。（1～2時間）
- 第六次……自分の俳句の世界を振り返る（1時間）……資料B
- 第七次……みんなの手作りはがきを見る（課外）……資料C

資　料　A

私の四季――俳句アンソロジー（私の好きな俳句）No.1（　　）

氏名（　　）

〈作成の手順〉

一、大まかな項目を決めよう。

（歳時記より）……例を見ること

〝初　冬〟

1. 自　然……冬、立冬、初冬、冬めく、十一月、冬日、短日、小春、時雨、霜、霙、冬の鵞、冬構、目貼、風除、霜除、炉開、

2. 生　活……（スポーツ等はここにある）木の葉髪

3. 風　習……神の旅、七五三、神楽、（風俗）西の市、芭蕉忌、一葉忌、顔見世

4. 動　物……熊、猪、狼、羚羊、狐、狸、むささび、鯛、鯨、冬の鳥、鷺、鷹、鶴、白鳥、笹鳴、鴨、冬の蝶、冬のはえ

5. 植　物……冬紅葉、散紅葉、落葉、朱欒、蜜柑、柚、三宝柑、金柑、榛榛、返り花、冬薔、山茶花、八つ手の花、茶の花、柊の花、枇杷の花、冬草、冬菊

学校の歳時記は大きく五部にわかれています。一年間を通してのテーマをまず決め、印をつけてみましょう。（右の番号のところに）

二、第二ステップ

さて、大きなテーマを心にとどめて次の準備をはじめます。

〈歳時記の季節をみよう〉

下の表を見てごらんなさい。歳時記を使って、頭を整理していきましょう。

三、第三ステップ

下の表に、自分のテーマの中の題材を二つぐらいは選んでみましょう。（どうしてもなければ一つでもよい）勿論、歳時記を使ってですよ。

冬からはじめます。ページを入れておくとあとで便利だぞ!!

季節	春の部		夏の部		秋の部		冬の部		
a	早春	闌春	初夏	（　）	初秋	（　）	晩秋	初冬	仲冬	※新年	（　）
b 季節の中											
二つぐらいは選んでおこう。											

ここへ入れるのは自分が興味を持てそうな季語です。どんな俳句かのぞいてみたいような。

※「新年」のらんの記し方

目次を見て、自分が一番新年を感じるような季語を三つさがしておこう。

資　料　B

俳句で創る一年……季語（四季のことばより）

（三一三二）
名（上　○　康　○）
氏

自分の作品と今までの学習をふりかえって

一　私の意図　たくさんの中からなぜこの俳句にしたか？

〈春〉……
○（猫）
私も猫を飼っていて、春は、よその家のブロックの上とかにいて、うらぎられたって感じがする。感じ方が似ていた。

〈夏〉……
○（鹿の子）
野生の動物は、こういう動作はよくあるけど、初夏という感じがするし、新鮮だから。

〈秋〉……
○（渡り鳥）
この俳句は、めずらしく「鳥の方から、作者をみた。」という作り方である。他のにはないような句で良。

〈冬〉……
○（狐）
古い昔の家を想像する。夜で、すごく静かな感じがするので、心がおちつくみたいな感じ。

〈新年〉……
○（餅）
最初みたとき、かわいいなぁと思った。おもしろいという反面、餅もかわいそうだなぁと思った。

二　私の世界――私のテーマ、気持ち――

全体的に暗いかなぁと思ったけど、なんとなく、さびしい気持ちが表われているのではないかなぁと思う。自分ではそういう気持ちはないと思うけど、表われているということはやっぱり〝さびしさ〟というものがあるかもしれない。しかし、さびしさよりも〝静けさ〟かな。心の中で〝静けさ〟みたいなものを求めているような気がしました。

三　私と俳句――学習をふりかえって――

今まで短歌しかなかったので、俳句ってものたりないなぁと思っていたけど、季語とか、いろいろなものがつかってあって、授業が進むたびに、俳句って短歌より新鮮だなぁと思うようになった。はがきづくりも、初めてやったし、その中に俳句を入れ込むということもおもしろかった。作者の気持ち、奥深くあるような感情などがなんとなく感じられて、すごく勉強になったと思う。

四　俳句をひとつひねってみるか。

クリスマス　あなたを探す　夢の中

俳句を選び出すにあたって、歳時記の中のたくさんの同じ季語を扱った俳句の中から一つ選んできました。

自分では気づかないうちに、選んだその結果をじっくりながめてみると、多分、そこにはいくつかの自分が俳句をみつめてきた視点、意図があるように思います。

では、ふりかえって自分をみつめなおしてみましょう。

（補）

俳句の作品で四季を頭の中に想いえがきながら一年を組み立ててきました。その底に流れる、あなたのテーマや、一年をどう感じているか、そして、その気持ちが表現されたかなど……

中学校での学習では三年生ではじめて俳句ができたのですが、俳句について、はじめに感じていた印象や抵抗と、この学習のあとでの俳句とあなたについて書いておきましょう。

（作業、歳時記、ハガキなどふりかえって）

四（その心）

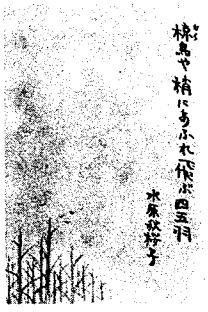
あなたというのは、サンタでも好きな人でもどちらでも想像にまかせますが、実際は、夢の中でしか会えないということが言いたい。この季節にぴったりだと思います。（俳句でもなんでもないような気がするけど…）季語クリスマス

資　料　C

（冬）

（夏）

（秋）



（冬）

（新年）

2. 実践①の成果と反省

1) 自己との出会い

まず取り上げたいこととして、指導のポイント 3) 自己との出会いがある。初めて出会った歳時記を使って、個々の四季を描かせたわけだが、生徒は次のような感想を残している。

ぼくは項目を動物にしてかいてきました。何気なく自分の好きなものとかで選んでいましたが、ふと気がついてみると、変わった能力を持っている動物を選んでいました。燕は空を自由にとび、かわせみは素早い動きで魚をとらえ、鮭は海へ旅に出ても生まれた川にもどってき、河豚はものすごく大きく膨れる。これらの能力は、それぞれの季節で引き立つ。だから生きるための力といえる。これらの動物は人間のように一年中同じように生きてはいない。短い期間だけ表舞台に出る。その間にせいいっぱい自己ＰＲをしている。この自己ＰＲが一生懸命に生きることにつながる。自分の世界は、四季を表わすのと同時にその季節の「生きること」も表わしていたようだ。（M男）

（この生徒は、題材にひかれて俳句を選んでいる。だから極端なことをいえば、その動物が詠みこまれていればどの俳句でもよいのかもしれない。取り上げた題材段階にしかまだ眼がいっていないのが残念である。）

私の選んだ俳句は、にぎやかな感じのするものは少なく、静かな感じのするものが多いです。静かな中にも－強さ－みたいなものを感じる俳句を選んでいたようです。

あともう一つは、全部、花の咲く植物だということです。季節ごとにいろいろな花が咲きます。それらは、とてもきれいに、優しく咲きます。しかし、生きるための強さも持っていると思い、それに魅力を感じ選びました。（Y子）

（この生徒の場合は、選んだ俳句でなければならない一つの眼がある。それらの俳句に出会うことによって認識を新たにさせられたところが明らかである。このように自己を見つめた鑑賞がもっと溢れてくるようにしたい。）

私は自然の力強さみたいなものを捜していたようだ。・・・夏といえば海、そして力強く動き出す動植物。「飛魚の翼はりつめ飛びにけり」飛魚の力強く飛ぶ姿に夏だという感じを受けた。夏に動き出す動植物たちには「さあいくぞっ」という意気込みが溢れていると思う。こういう自然と動物の密接な関係に知らず知らずひかれていたんだと思う。これからの学歴社会の中で、私達は了見が一段と狭まってくるだろう。でも、自然のあの雄大さを見失わないよう努力したいと思う。とにかく、すべて人類は自然に魅せられているのだと思います。（N子）……資料Ｃ参照

（この生徒の場合も、好きなものを選び出し、それを分析することによって、自分の心の中にあった視点を捜し出している。そして、今まで以上に自然が自分の身近に迫ってきていると思われる。）

以上見てきたように、生徒たちは俳句を選ぶという活動を通して、そこに自分の心を見ているのである。つまり、選び出し、鑑賞し、表現するという学習を通して、改めて自分のものを見る観点・視点というものを知ることができるのである。ここで自分と作品との関わりができるのである。これを自覚させることが少しでもできた時、中学生の鑑賞の一つの在り方がそこ

に見えてきているといえると思う。そして、“出会い”の学習の大切さも確認できると思う。

2）歳時記との出会い　自然（季節）や人生をことばから感ずる心を大切に

①　歳時記の力、魅力……指導のポイント1）

歳時記について、こんなコメントがある。「……とにかくこんな不思議なものは外国のどこを捜してもない。国民の感受性の集大成がアンソロジーの形になっている。……「国民感覚大辞典」とでもいうべきもので、こんなものはほかの国にはまったくないわけですね。しかも、その「国民感覚大辞典」は季題でひく仕掛けになっている……。」(注4)

筆者はこの学習で学習者たちと歳時記との出会いを重要に考える。歳時記の中には自然や人生がたくさんつめられている。現在の中学生、いや大人たちの中でも、文明が進むにつれて自然から離れ、自然から遠ざかり、日常の中に息づいている生命の音や動き、色や香りを知りながらも感じる心が鈍くなってきている。こういう今だからこそ、中学生という多感なはずのこの時期に、自分の視点を持って歳時記と出会わせたかったのである。また、自然喪失のこの時代だからこそ、歳時記をむしろ積極的に学習の中に取り組むことで、自然感覚の育成にも役立てることができそうな気がするのである。

人間の感性を育てるための大切な苗床である自然。その自然や人生を表現していることばに歳時記を通して触れさせ、そして、選ぶという活動を組み込んだ時、必然的に触れる俳句作品が増えていくことになるのである。

自然に対する人間の恋い焦がれる気持ち、五穀豊穣を祈る純粋な心、その自然の中の一つに人間がいる。季題は人間と宇宙のキーワードである。俳句を学習するということは、自然とふれあうこと、それは根源においては人の命の尊さを教えることになるかもしれない。

②　歳時記の教材としての問題点

一般に（今回使用したものも）歳時記自体が大人を対象にしたものであり、中学生向きではないことが上げられる。であるから、この歳時記が今回の学習者である3年生にどれだけ適していた教材であるかは疑問である。しかし、中学生としてそれぞれが楽しみながら歳時記を開いていたという印象が、今回の実践から感じられた。

3）反　　省

この実践①によって俳句が生徒の心に近づいていった感触を得た。それは学習への取り組みの態度、そして、感想からも感じ取ることができる。

「俳句とか短歌とか聞くと抵抗があってどうしても近寄りがたいという感じだったけど、歳時記などより自分の興味のもてる俳句を選んだことによって、遠い存在ではなくなったような気がする。ちょっと難しいような俳句があっても、自分の興味のもてるテーマで選んだから、そんなに難しく感じなかった。自分で俳句を作るということになると、まだとまどいがあったり、冗談ぽくなったりするかもしれないけれど、ここで勉強して俳句に対する気持ちみたいなものが一歩近づいたのでよかった。」（A子）

「俳句は短いけれど作者の気持ちをある程度想うことができる。初めから抵抗の方は少なくて、結構興味があった。でもやってみると、抵抗はないけど難しいなあっという気がした。17

音の中に季語が入ると余計に。そう思うと、歴史に残る句を作った人はすごいと思った。新聞にもよく俳句や短歌が載っていて、今までは見もしなかったけど、最近は季語を捜したり、チラッとでも目を通すようになった。」（K子）

自己と俳句との関わりをしっかり見つけることができ、生徒たちが新たな自分、または、改めて自分の中に潜んでいた一面を俳句と出会う学習から見つけ出してくれていたようである。

しかし、問題点もいくつかみられた。

第一に、つたなくても実作によって俳句の世界に親しますことができなかったこと。

第二に、自由律俳句をあまり取り上げなかったため、生徒に俳句の世界のある一面しか紹介できなかったこと。

第三に、違う眼で見た俳句の世界に触れさせることが足りなかったこと。

以上の三点の反省をいかし、実践②に移っていきたい。（これは、筆者が偶然二年連続で三年生を担当したため、まだ実践①の感触が暖かい内に実践したものである。）

3. 実　践　②

1）単元名「俳句に親しむ」～コメントで膨らませる俳句学習～

（3年生　平成元年12月実施）

2）教材「俳句一世界で最も短い詩」（鷹羽狩行）・現代俳句歳時記（編者・水原秋桜子）

各教科書の中から抜き出した俳句、解説、鑑賞文

3）単元設定の理由

筆者は、実践①によって出会いの大切さを確かに感じ、また、生徒たちもいきいきと学習に取り組んでいたので、実践①の理由の上に、生徒の反応を考えながら、反省で上げた三点（指導のポイントの4）、5）が重なってくる）に重点を置いて指導することにした。

4）目　　標

① 俳句についてのお互いの想像を聞き合う中で、自分の世界を広げる。

② たくさんの俳句に触れ、好きな俳句をつくる。

③ つたなくても実作することによって俳句に親しむ。

5）指導計画

・第一次……耕し（国語教室通信と第一次から第三次までの間の実作への挑戦）

歳時記の季語を使ってつくる実作や一部分を抜いて想像する実作によって

・第二次……俳句の歴史に触れる。（1時間）

・第三次……教科書の俳句から想像を広げる。（2時間）……実践①の第二次と下稿参照…資料D

・第四次……一枚の白い世界に自分の世界を広げる。（2～3時間）……資料ＥＦＧ

参考俳句、教科書、歳時記から好きな俳句を二句選び、自由詩、物語、絵画、解説、鑑賞文、感想に変形する。そして、歳時記から参考俳句、季語の解説を入れる。

・第五次……グループごとに回覧し、三枚のカードのいずれかで、作者（生徒）へのメッセージ、批評をかく。受け取った本人はノートにまとめる。（3時間）

・第六次……コメント集作り（整理とまとめ）（2時間）……資料H

4. 実践②の中から

1) 実作への試み（指導のポイント4））

授業の始めに歳時記の中から今日の季語を数種選び、その季語を使って五七五のリズムにのせて俳句の世界に近づこうとしてみた。

（例）　11月の授業から……季語“コスモス”を使って

これは、校内マラソン大会が開かれた時、そのスタート地点まで歩く道々にコスモスが咲き、風に揺れていたのが筆者の心に残っていた。ここで、この季語を生徒たちにぶつけてみてはと、授業の中で実践したものである。

- コスモスや風にゆられる秋のうた（N子）
- コスモスでひとり占う好き・きらい（H子）
- コスモスや冷たい風に身をゆだね（I男）
- コスモスやみて立ち止まる人ひとり（T子）

この例のように、とにかく俳句の世界になれることを目標にして、作品主義にならないように気をつけて心を耕していった。また期末考査では厳しい寒さのころなので、隙間風・霰・虎落笛などの季語から実作へチャレンジさせてみた。

- 隙間風筆を休めて閉め直す
- 耳ふさぎ童おそれし虎落笛
- 虎落笛肩をすくめて空見上げ
- 霰にて破れし雲から降る光
- 道端に犬うずくまる霰の日
- 虎落笛振り切り走る頬赤く

それぞれの作品をより高めてやれる力は筆者にはないけれども、学習の中に、生徒の作品の紹介を入れることによって、時には驚きの声も上がり、生徒たちの世界に俳句が入り込みつつある感触を得ることができた。

2) 第三次……教科書の俳句から想像を広げる。

（実践①②共通　資料D参照）

資　料　D

“出会い”をポイントにしたこの俳句学習の中で、この学習過程は大切になってくる。ここでは一斉指導であるが、拡散的になりやすいこの単元にここで楔を打っておくのである。

つまり、言語のもつ多彩な働きを確認しておくのである。ここでは、教科書の二句を取り上げた。右のプリントはその時のものである。ここに二つの俳句があげてある。一つは教科書からとったものであり、もう一つは筆者がある意図を持って似せて作ったものである。学習者たちのほとんどは教科書をまだ見ていない、そこでこの二つの俳句に出会わせていった時、面白い現象が起こる。生徒たちは筆者

の俳句の方を初めは好むのである。

しかし、何度も繰り返して読み、声に出していき、その句の中に見える状況や声、音、空気、などを見つめていくと、やはりその違いに気づいてくる。

こうして学習者の認識を揺さぶり、言葉の重みを経験させておいてから学習に入っていくことで、少しでも学習者の俳句を選び鑑賞する時の刺激とし、低次元での自己満足を防ごうという意図を持っているのである。

3）歳時記を利用しての生徒作品

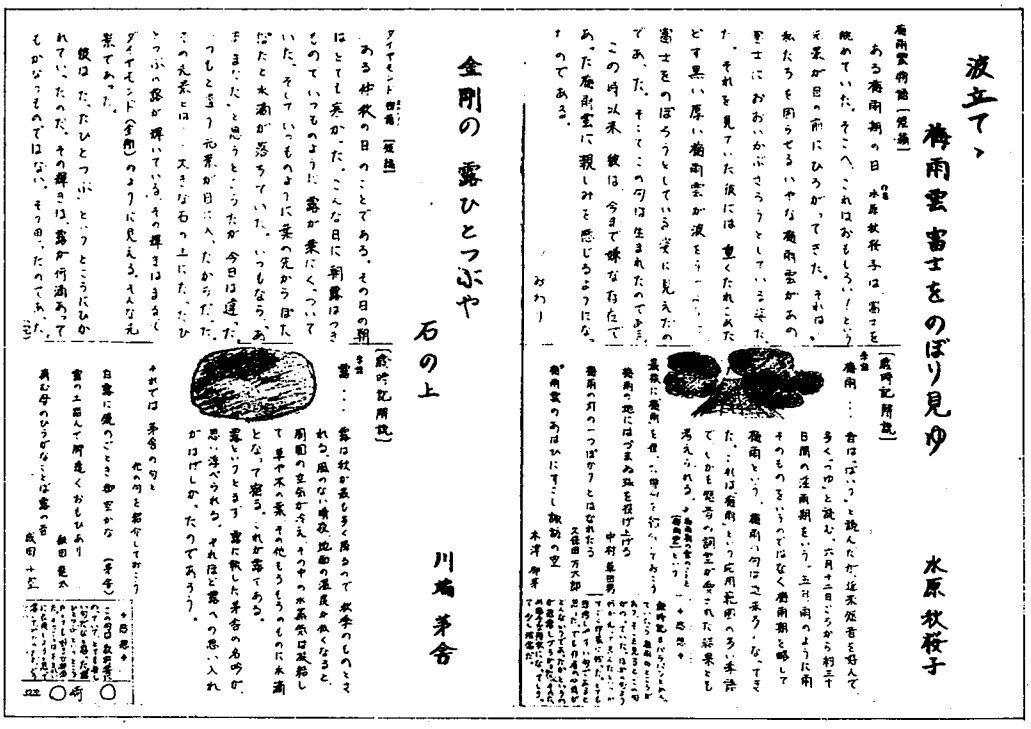
（ここでは資料Ｅが絵で表現したもの、資料Ｆが自由詩と絵で表現したもの、資料Ｇは物語で表現したものである）

資　料　Ｅ

資料 F

一連の露りんりんと糸芒
川端茅舎
金剛の露ひとつぶや石の上
川端茅舎

資料 G


波立て、梅雨雲富士をのぼり見ゆ
水原秋桜子
金剛の露ひとつぶや石の上
川端茅舎

4）三枚のカード（指導のポイント5））……資料H

生徒は次のようにカードを使っていった。……K子さんの作品（資料F参照）に対してN男くん、T子さん、Y男くんが書いたコメントの例である。

・赤のカード（内容について初めて知ったこと、解釈のしかたの面白いところについて書く）

　・詩をかいているところがすごい。露は秋のものとは初めて知りました。N男

・青のカード（表現の工夫、おもしろさについて書く）

　～絵・文の工夫・色のつけ方・字の大きさ・書き方・紙面の充実度～

　・黒だけで、とても具体的な俳句だと感じました。T子

・黄のカード（全体から感じたこと、または、その人へのメッセージを書く）

　～構成の仕方、文字の丁寧さ、素直な感想・誤字があれば教えてあげよう～

　・筆書きの字もうまいし、鉛筆画もうまい。詩もしぶい。構成も工夫してあり、独特でいいと思う。一つの風景に二つの句。とてもよい、しぶい作品だ。Y男

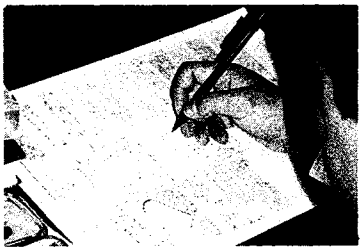
こういうふうなコメントをグループになって書きつけていったわけである。

次の資料はそのコメント集であり、コメントを自分の意図をもってまとめ、各自の俳句への思いを題にして、表現したものである。

資　料　H

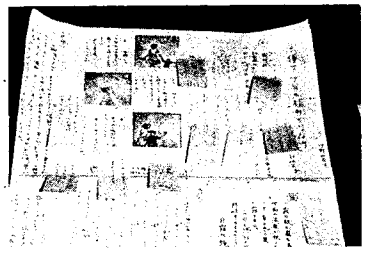
学級内のメンバーであるから、勿論顔を浮かべ、日頃の言動や印象を持ちながらコメントしていったのであるが、その学習後の感想を少しあげてみよう。

「みんなとても上手で驚きました。絵のすごくうまい人とか、今まで知らなかったのに見つかって、その人の大切な秘密を盗み見たような気がしました。私の作ったプリントを見てほとんどの人がほめてくれとても嬉しかったです。「絵本のようだ」とか「かわいい」というのが多くて、私のねらいをみんなわかってくれたと思いました。というのも俳句や絵をなるべく可愛くて昔くさくないのを選んで、絵も子供っぽくしたつもりだったので、そんな私にとってはありがたいコメントでした。」（Ｉ子）

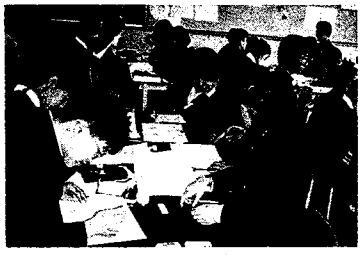


「俳句を勉強してみて、今まで俳句なんかは興味がなかったし、私とは別世界のものだと思っていたけれど、五七五のリズムに自分の気持ちが表しやすいので、俳句に対しての考えが変わりました。自分で俳句を選んでいろいろ歳時記を使って調べ、それに関する絵を書いたりして、初めて深く俳句を味わいました。みんなの作品を見て、みんなすごいなあと思いました。普段とは想像もつかない人が、絵や文がとてもうまかったりして、新しい友達の一面が見られました。あと、構成とかも人のを見てよくわかりました。今、俳句を勉強してみて、もっと早くから俳句を知ればよかったなあと思いました。ただ嫌いと思い込むだけではなくて、実際やってみないとわからないということをつくづく思いました。」（Ｙ子）

「この俳句の勉強をして、勉強する前とあとではかなり変わったと思います。特に私が選んだ二つの俳句については、いろんなことを調べたりしたので、色々なことがわかったし、随分その句に対しての考え方も変わってきました。……」（Ｍ子）



「このように自分たちで自分の好きな俳句を選び、自分なりに工夫して、人に見せることによって、なにか前より俳句に対しての考え方がちょっと変わったような気がする結構みんなきれいに、わかりやすく、頑張って書いていた自分のを作るだけが俳句に近づくのではなく、人のを読むことによっても近づけたと思う。……」（Ｋ男）



上の感想を見ると、一様に、学習前と学習後では俳句に対しての見方に変容がある。そして、ある生徒の心には深く鑑賞したという実感が残り、また、別の生徒の心には、俳句を近くに引き寄せたという気持が生まれている。このコメント学習の効果は、絶えず相手を意識した学習となるため、生徒たちの心に緊張感や刺激が生まれることがあげられる。

Ⅴ 考　　察

今回の実践の指導ポイントと生徒の反応について折にふれて考えてきたが、もう少し考察してみたい。

1. 歳時記との出会い（実践①・②）

今回出会わせた歳時記は、生徒にとってはかなり背伸びしながら触れていくものであったようだ。しかし、この時期に日本の「国民感覚大辞典」ともいうべき歳時記に触れていくことは、それ自体意義が大きいはずである。歳時記は読む辞典という点で類を見ないものであり、中学生のこの時期に自分の興味・関心から歳時記とふれあうことによって、生徒の言葉への関心は高まっていこうとしていると考える。

2. たくさんの俳句との出会い（実践①・②）

前にも述べたように、生徒たちはもともと俳句と出会う絶対量が少ないのであるから、教師が学習の計画・教材を工夫していくことによって、出会いの量を増やしてやらねばならない。俳句の学習の中においては、俳句の特性も考え、教科書の中のわずかな俳句のみではなく、生徒の生活と関わりのある俳句、この時期に出会わせておきたい俳句など、教師の教材を見つける努力が大切になってくる。

そして、その後、古典学習と結びつけ、百人一首によって日本語のリズムを楽しみ、「奥の細道」を俳句と百人一首との関わりを考えながら学習していったことも、生徒の実態に合った学習の流れであったと考えられる。

3. 自己との出会い（実践①・②）

作品を選ぶ、それも自分の好みで選んでいくということは簡単なようで意外と難しい面がある。作品を自分の心のフィルターを通してみるのであるから、選んでいったものをあとで分析させてみればよくわかるように、いま現在の自分の関心のあるもの、思い出に残っているものなど、自己の心との関わりで作品が選ばれている。

4. 実作からの発見と出会い（実践②）

今まで見てきたように、初めは俳句という言葉だけで、何か自分とかけ離れた学習をするかのように考えていた生徒たちも、下手であってもまず教師がその場で実作し、その後、生徒たちも共に上手下手にこだわりなく五七五のリズムにのせて実作することによって、俳句への距離が近くなっていったように思われる。

5. 違う鑑賞との出会い（実践②）

生徒たちはこういう学習をすることによって、他人の眼にふれることを心に留めながら自分なりの作品解釈を広げ、作品作りをしていく。そこに緊張感が生まれ、いいものを創りたいという思いも強くなってくる。そして、個性あふれる友達の作品を見ながら、その生徒へのコメントをかくということは、その人物と俳句との関わりを思い浮かべながら学習していくことにつながる。自分の俳句への考えや解釈をもって、他の人の俳句とその解釈・鑑賞を見つめていく。同感したり、またその受け取り方の違いに驚きながら、みんなの作品を見つめてコメントを書く。こうい

う刺激を受けながら、とても意欲的に取り組んでいたのが印象に残った。そして、今後は鑑賞文の書き方という学習に発展させて行くことも考えられる。

Ⅵ　まとめと今後の課題

今の生徒の傾向として、何にでも答えを求め、答えを欲しがるということが上げられる。しかし、俳句の場合、あまり解釈や分析に力点をおき過ぎると、生徒の存在感のない学習となってしまう。

解釈の多様性について一例を上げてみよう。（教科書の俳句から）

「眼にあてて海が透くなり桜貝」　　松本たかし

1. 教科書解説・鑑賞より（鷹羽狩行）
「……この桜貝を浜辺で拾い、目に当ててみる。すると眼前の海が透いてみえたという。しかし実際には、桜貝を目に当てても何も見えない。……つまり、桜貝の中に幻のように浮かび出た海に、春の美しい浜辺の象徴をみたのだろう。」
2. 「春の俳句」俳句鑑賞歳時記（大野林火）より
「眼にあてて海が透くなり桜貝」とは美しいロマンだ。透いてみえるものは海ばかりでなく、遠き故にたのしい思い出であろう。いま曽ての桜貝を取り出して眼に当てれば、曽遊の江比間の海が見えるにちがいない。」
3. 「教科書に出てくる俳句」くもん出版
「（病の床にいる作者が）ピンク色の美しい桜貝を目に当ててみると、その美しい貝がらをすかして、春の海ののびやかな情景が浮かんでくるようだ。」

上の一例からも感じられるように、俳句には多義性がついてまわる。そこが俳句の面白さでもあるかもしれないが、そこを分析的に学習の中に積極的に取り入れていくより、今の中学生に必要なことは、俳句という日本の伝統的な文芸にまず親しませることなのではないだろうか。

子供が文芸を身近に感じるということは、生活の中に俳句が入り込んでいくということだ。そのためには、中学生には中学生に合った、生活の中できらりと光る俳句教材を捜して行かなければならない。従って、教科書ばかりでなく、学習者を心に置いて複数の俳句教材を教師が捜し出し、出会わせて行くことが必要になってくる。

今回は歳時記を中心に実践してきたが、難しいながら生徒は自分の生活を思い浮かべ、生活の中から今の自分に合った俳句を選んでいることに驚かされる。

また、小学校で俳句に触れてから、中学校では三年生になるまで俳句に出会うことはない。しかし、これでは生徒にとって、俳句はいつまでも身近になることは難しい。つまり、中学校ではもっと計画的に俳句と出会わせる工夫を考えなければならない。俳句への耕しといってもいいと思われる。まず簡単にできるのは国語教室通信（国語科担当教師が一週間に一枚、授業の中で扱えない国語の力をつけようとして作る補助教材）である。年間約40号になるこの通信を計画的に仕組み、少しずつ俳句に出会わせて行くことができそうである。また、掲示などの言語環境の中で俳句に触れさせて行くことも、大切に考えていかなければならないだろう。

学習者にとっての俳句学習は、こうありたい。まず出会わせる、名句とされる俳句ばかりでなく、

中学生の作った俳句、外国の子供たちが作った俳句、さまざまな俳句と出会わせる。

そこから、自己を切り開く。意外と自分で自分自身というものは見えてこないところがある。それを、自分で選んだ俳句をながめ、分析しながら見つけていく。新しい自分、思いがけない自分、作品によって認識を新たにさせられた自分が見えてくるようにする。そこから俳句に対して親しみが生まれてくる。そして、それが個々の生活の中へ溶け込むことを願っている。

俳句についての中学生の印象をあげてみると、「古臭い、年よりくさい、堅い、わけのわからないもの」という印象が強い。こういう印象の強い俳句をどう中学生に出会わせていくのかは大きな課題であり、その一つの方法として、今回のように、俳句の短詩型という便利なところを利用した学習がある。小説では、学習者個々に別の作品を読ませ、すぐにそれについて話すことなどできようはずもない。しかし俳句なら、学習者たちに自由にさまざまな作品を読ませていくことが、短時間の内に可能である。つまり、学習者たちに任せる、それぞれが自己へ語りかけるような学習を展開することが可能なのである。

しかし、学習者それぞれに俳句を任すことの怖さもある。

「俳句のもつ多義性は、多様な読みや解釈をうみだします。それはそれで、鑑賞という行為を楽しくさせてくれます。一つの正解を求めていくような読みのこわばりから、少なくとも解放させてくれます。しかし、多様な読みや解釈をうみだすだけでは、鑑賞という行為のもう一つの楽しさがぬけてしまうと思うのです。……自分の価値観の範囲内で納得したいときに、「わかる」という安定をつい求めたくなるものだということです。そのとき、新しいものごととの出会いがはばまれてしまう。自分の内部が変えられていくことの快さが、ある意味で、すぐれた文学との出会いによってもたらされる鑑賞なわけですから、「わかる」という了解の仕方はときに警戒を要します。」(注2)

それは、学習者が自分なりの読みをしていくと、低次元のところで自己満足し、自己中心的になり、一つの言葉の重み、助詞一つに凝縮された思いに気付くことなく、勝手な思い込みをしたままで学習を終わってしまう大きな危険が考えられるということである。この怖さも指導者はしっかり心におきながら、学習者たちがいきいきと取り組んでいく単元開発に努めなければならない。

〈参考文献〉

（注１）　谷川俊太郎・竹内敏晴・稲垣忠彦　　詩の授業から　「にほんごの授業」Ｐ 22　国土社

（注２）　足立悦男　俳句教材の扱いについて　「国語教育雑誌　第 13 号」Ｐ 1. 5. 7. 京都私立中学高等学校国語科研究会

（注３）　野地潤家　親近感の醸成と個々の発見を大切に　「実践国語研究 No. 90 」Ｐ 6　明治図書

（注４）　高橋睦郎　「俳」の精神（座談会）　「言語生活 No. 385 」Ｐ 11　筑摩書房

〈主な参考文献〉

・工藤信彦　短歌・俳句　指導の意義と方法　「中学校国語科教育講座」第二巻　有精堂

・谷川俊太郎・竹内敏晴・稲垣忠彦　「詩の授業」　国土社

・桑原　隆　言語文化に親しむ　「月刊国語教育研究 No. 185 」　日本国語教育学会

・倉沢栄吉　国語教育講義　　「倉沢栄吉国語教育全集」第 12 巻　角川書店